

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 稲田 雅洋

学位請求者 楊 善英

論 文 日本キリスト教婦人矯風会の廃娼運動

【審査結果】

本論文は、近代日本の廃娼運動において大きな役割をはたした日本キリスト教婦人矯風会（以下、矯風会と略記する）の活動について、1886年の東京矯風会の結成から1935年の国民純潔同盟の成立までの約50年間を対象として扱ったものである。

本論文の特長は、矯風会の機関誌・紙をはじめ幾多の資史料によりながら、主に矯風会の地方支部と、それらを通じたネットワークの実態を解明したことであり、そこには旧来の研究では出されていなかった多くの事実も提示されている。

審査委員会は、本論文および最終試験（公開審査）の結果を総合的に判断して、博士(学術)の学位に値するものとした。

【論文の概要】

序章は、これまでの研究史の整理と自らの課題を述べたものであるが、各章の概要は、以下の通りである。

第一章は、矯風会の設立過程とその後の活動を明らかにしたものである。具体的には、世界キリスト教婦人禁酒同盟の影響を受けて、1886年に設立された東京婦人矯風会が、日本の実情に即して、女性の地位向上や権利拡張のために矯風運動を開始した経緯と、その後の「刑法及び民法改正請願」（姦通罪における男女平等の立法制定）の運動、「在外国売淫取締法制定の請願」（海外売春婦の密航取り締りの強化）の運動、および機関誌の刊行や演説会の開催による廃娼運動の展開を見るとともに、その過程を通じて、矯風会が全国廃娼同盟会（1890年結成）の中心的な団体となっていったことを確認した。

第二章は、1893年4月日に全国的組織として日本婦人矯風会が結成される過程と、それ以後の各支部の活動を見たものである。具体的には、1900年代に展開された前橋・旭川・和歌山・大阪などでの遊廓設置反対運動や遊廓移転運動を取り上げている。そして、各支部がそれぞれの地域で運動の拠点となり、女性活動家たちを束ねて、運動を進めていった過程を明らかにしている。

第三章は、1911年の廃娼団体である廓清会の発足から、矯風会が廃娼の年として目標に設定した1921年までの10年間にわたる矯風会の活動を検討したものである。その具体的な活動は、以下のようなものである。①男女平等の貞操観念を規範とする国民道徳の確立をめざして公娼全廃教育運動を進めたこと、②地方巡回演説を通じて、支部の新設や会員の増加に努めるとともに、キリスト教団体、女性記者倶楽部、処女会など他の女性団体と

の連帯をはかったこと、③ シベリアや島原・天草地方への実状視察などを通じて、海外売春婦を防止するための積極的な防止策を模索したこと、④人身売買・暴力による強制売春などから女性を保護するための立法の制定運動を展開したこと、⑤廃娼運動の財政的基盤の確保のために「五銭袋運動」を発案し、その運動を全国的に展開したこと、である。

第四章は、1923年9月の関東大震によって、廃娼運動が急速に新たな展開を見せていく過程と、それへの反応・反響など世論のあり方を検討したものである。特に、本論文では、大震災時における娼妓の大惨事により、公娼制度は「奴隸的」人身拘束であるという事実が明らかとなったことから、「母性保護」論争においては意見を異にしていた女性活動家たちが、公娼廃止という点ではともに一致して行動したことに意義を見ている。また、この時期には、急激に盛り上がった廃娼運動が朝鮮にも波及して、朝鮮での廃娼運動の展開に刺戟や影響を与えることになったことも言及している。

第五章は、1920年代後半から1930年代前半における廃娼運動の高揚と転換を考察したものである。まず、1926年6月、矯風会と廓清会との連合組織である廃娼連盟が結成され（本論文では、矯風会を「五銭袋運動」その他を基盤にして主に資金集めの役割を担ったものとしている）、その廃娼連盟が中心となり、禁酒会・教会・学校・婦人会・仏教団体などを糾合した廃娼運動団体（「廃娼既成同盟会」など）が41府県で作られて、それらの運動の結果として、10余の県会で廃娼決議が出されたり、埼玉・秋田県で廃娼が実施されることになった過程を追いかけている。

さらに、1930年代に入ると、運動は「廃娼」から「絶娼」をめざすようになるが、国策との関係もあって、廃娼連盟は純潔運動への転換を図ることになる（「国民純潔同盟」の結成）。本論文では、その功罪を指摘しながら、それによって運動が広範囲になった面のあることを挙げている。

終章は、各章で明らかにしたことをふまえて、その意義と問題点、今後の課題を述べたものである。

【論文の評価】

廃娼運動に関して長期にわたって見たものとしては、廃娼運動の活動家である伊藤秀吉による『日本廃娼運動史』（1931年）、矯風会自らによる『日本キリスト教婦人矯風会百年史』（1986年）があり、さらには概説書としては竹村民郎『廃娼運動』（1982年）がある。しかし、矯風会を対象としてその長期にわたる活動を取り上げた研究論文としては、この論文がはじめてである。（筆者は韓国人であり、そのアイデンティティをこの研究の内に秘めてはいるが、それを表面には出していない。）

本論文の評価できるところは、『矯風会雑誌』『婦人新報』・パンフなどの矯風による誌紙類やそれぞれの時期に出されていた多くの新聞・雑誌を駆使しながら、矯風会の成立から50余年の活動を通年的に見たことである。このように、矯風会の誌紙類丹念に読み通すことによって矯風会各地の支部の活動について、豊かな事実を発掘したことは高く評価でき

よう。

特に、1890年代から1900年代にいたる支部人数の増加の実態や、日露戦後に行われた遊廓新設反対や移転運動における矯風会各支部の活動とその役割、また1910年代以降の各地の支部数の増加と活動の活性化、1920年代の朝鮮・「満州」などでの支部の結成、さらに純潔運動における廃娼善後策の樹立について明らかにしたことは特筆されるものであると言える。

しかし、こうした多大な努力と、事実発掘の研究史上の意義を認めた上で、口頭試験においては、以下のような問題点が指摘された。

第一に、本人の目的意識のあり方に起因する問題であるが、矯風会の運動を全五期に分けて見ているものの、長期にわたる活動を全体的に扱おうとしているために、通史的な印象が強く、結局、従来の研究の誤りをただし、不十分な点を補ったに過ぎない形になっているということである。つまり、せつかく、新しい事実が積み重ねられながらも、新たな分析・考察の展開が不十分なのである。

第二に、そのこととも関連するが、各時期の運動の特徴を、それぞれの時代の客観的条件と重ねて考察しようとする視点が弱いということである。もちろん本論文からも、各時期ごとの運動の対象、課題、方法などが異なっていたことは分かるし、またその実態は詳しく描かれてはいるが、運動の高まりや成果が強調されているために、運動を必ずしも同時代のさまざまな動きの中で捉えていない面があるのである。たとえば、筆者は日露戦後にくりひろげられた遊廓反対運動を高く評価しているが、しかしながら実際には、運動が発展した地域とそうでない地域、成功した地域とそうでない地域があるのはなぜかというようなことを、日露戦後の都市のありかたの違い、担い手の違いなど、さまざまな要因から考えるべきではないのかという意見が出された。また、1920年代から30年代にかけて、支部およびその会員数の増加について、筆者は矯風会本部の資料から、膨大な表を作ってはいるが、なぜ会員が増加していったのかとか、この時期の地方支部の担い手はどのような人々であったかという点にまでは追究がおよんでいない。

第三に、個々のいくつかの点についても疑義が出された。たとえば、矯風会と郭清会・救世軍と共通点や相違点が明確になっていないこと、廃娼運動から純潔運動への転換に際しての廃娼団体(「廃娼既成同盟会」など)を構成する諸組織の位置づけがあいまいなこと、朝鮮・「満州」における矯風会支部の設置や廃娼運動の高まりについては、該地で当時出されていた新聞など使って新しい事実を提起してはいるが、展開が不十分であることなどである。

しかしながら、本論文が矯風会に関して、その成立から約50年にわたる活動を一通り論じた研究としては初めてのものであることや、さらに旧来の研究では出されていなかった豊富な事実も提示しているなどでは評価すべきものである。今回指摘された上記のような点を踏まえながら、今後の研究のさらなる発展を期待する。